JSPS Bonn Office
日本学術振興会ボン研究連絡センター

ニュースレター 2025 年
ぼんぼん時計　（号外）

内容

日本人研究者インタビュー.....2

ドイツで教授になる - ポスドク後のキャリアパス - 2

ドイツ研究者ネットワーク交流会のススメ.....3

センター長コラム.....4

学問の自由を図る.....4

センターからのお知らせ.....5

【表紙写真：Drachenburg 城から臨むライン川】JSPS Bonn Office や日本人スタッフの住居から程近いライン川対岸のエリアに、Königswinter という町があります。ここにある Drachenfels(„Dragon´s Rock")という丘の上には Drachenfels 城の廃墟が聳えており、『ニーベルンゲンの歌』に登場するジークフリートがドラゴンを倒し、返り血を浴びて不死になったという伝説が残されています。また、丘の中腹には瀟洒な Drachenburg 城があり、こちらは 19 世紀に裕福な銀行家が別荘として建造したもので、現在は一般に公開され、観光客でにぎわっています。また、土産物屋では伝説に因んだ「Drachenblut(Dragon blood)」と名付けられたワインが販売されています。

日本人研究者インタビュー

ドイツで教授になる - ポスドク後のキャリアパス -

コンスタンツ大学
磯野 江利香教授

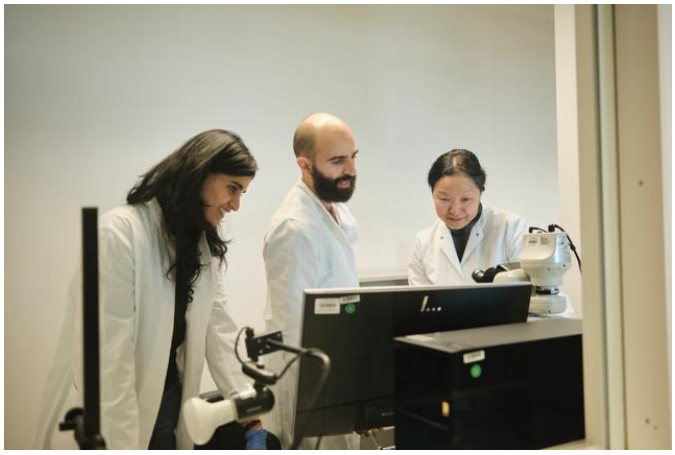
日本学術振興会のポスドクとしてドイツに来て、早いもので２０年近くの年月が経ちました。幼少の頃の両親の留学先のベルリン時代を含め人生の半分以上をドイツで過ごしていることになります。私の研究室は植物における選択的タンパク質分解の過程を分子レベルで解き明かし、その制御が気候変動などにおける植物の環境応答においてどのような役割を果たしているのかを明らかにすることを目標としています。

チュービンゲン大学、ミュンヘン工科大学、コンスタンツ大学とドイツの大学において教育・研究活動に携わって参りましたが、その間にドイツの研究環境は大きく変動しました。女性教授の比率は、自然科学分野ではまだ 2 割を切るものの、2023 年の連邦統計局の統計によると全体では 28.8％　（51,873 人中 14,939 人）に達しました。2002 年に導入されたジュニアプロフェッサー制度では、テニュアトラックと組み合わせれば、優れた研究者が早い段階で常勤のポジションを取れるようになりました。ジュニアプロフェッサーに限れば 2022 年時点で 1,800 人のうち半数が女性です。キャリアパスの多様化が進む中、C 給与体系から W 給与体系への切り替えとそれに伴う gender pay gap、また 2021 年には" #IchBinHanna (I am Hanna)"により、学界有期契約法(Wissenschaftszeitvertragsgesetz)の雇い止めにつながる問題点が浮き彫りになり、議論がなされています。

ポスドクの次のステップである独立グループリーダーのポジションはさまざまな研究機関で相当数あり、日本に比べて若手研究者が早いうちに独立できる環境が整っています。また 1999 年に始まったドイツ研究振興協会（DFG）の Emmy-Noether プログラムは博士号取得 4 年以内の研究者が応募でき、受け入れ研究機関を自由に選んで 6 年間研究室を運営できます。さらにその次のキャリアステップは常勤の(準)教授（W2・W3)のポジションです。同じ大学内で昇進できることは稀なので、近隣国も含めた公募に応募します。ただし国ごとに典型的なキャリアパスが異なるので情報収集が必須です。面接においては科研費等の取得実績、論文、教育経験、さらに大学の研究重点との整合性が評価されます。招聘を受けたあとの交渉はさまざまな条件を決めるために大切です。

言語と文化の違いは大きな壁ですが、最近では修士課程の講義は英語で行う大学が多く、外国人にとってもハードルが低くなってきています。はっきり物を言う文化に傷付かなくなれば、ドイツはいろいろなことが効率的で暮らしやすい国です。30 日間程の有給休暇があるため、夏は 3 週間ほど休暇を取る人が多く、オン・オフの切り替えが上手な人が多いと思います。

私自身は異国の研究環境に身を置くことで日本の素晴らしさを改めて認識することができました。海外での研究経験を持つ次世代の若い方々が、両国の良いところを生かしながら研究の発展を担ってくださることを期待しております。



▲磯野教授　研究室での一コマ

ドイツ研究者ネットワーク交流会のススメ

ハイデルベルク大学
石川 浩史 研究員

海外に留学する日本人研究者の多くは、米国を行き先に選ぶことが多く、米国の主要都市では日本人研究者の会が継続的に活発に活動しています。こうしたコミュニティーでは、留学して間もない学生やポスドクからシニアな研究者に至るまで、研究者のネットワークが形成され、充実した研究生活を送るためのヒントが共有されています。一方、驚くべきことに、欧州各国にはこうした間口の広い会が存在していませんでした。本稿では、筆者らが2022 年に立ち上げた「ドイツ研究者ネットワーク交流会」について、立ち上げの経緯と現状を述べます。

JSPS ボン連絡センターは、海外学振のサポートを受けて滞独している研究者などを対象としたキャリアセミナーを毎年開催しています。私がそれに参加したのは 2022 年秋のことで、似た境遇にある人たちがざっくばらんに語らえる稀有な機会という印象でした。対面で日本語を話せることへの感動もあってか、研究者主体の交流会ができたら良いと淡く呟く参加者は少なくなかったです。その翌朝、ホテルのチェックアウトの列で偶然居合わせた後の共同発起人・今里和樹さん（マックスプランク研究所）とのブレインストーミングが自然と始まり、帰宅する頃には立ち上げの青写真が描かれていました。

研究者交流会はオーガナイザーの帰国に伴い活動休止となる傾向があるため、継続できる仕組みを予め組み込んで立ち上げることにしました。具体的には、ドイツで長く活動している組織と協力しながら運営することや、運営に携わる研究者有志の負担をできる限り軽減する仕組みを整えることに重点を置き、在独日本国大使館や JSPS ボン連絡センターと連携することにしました。私たちの活動方針は一貫して、有志がやりたいことを実現するということです。研究者の役割を交流会の企画に集中させる一方、議事録作成や会場手配などは事務局が担う、まさに餅は餅屋のチームワークで運営しています。

また、多様性の獲得も継続において重要であると考え、参加者のスペクトラムを広げる工夫を重ねてきました。例えば、文理を問わず多様なバックグラウンドを持つ研究者に運営に参加してもらうことで、リーチできる研究者層が大きく変わることがわかりました。さらに、ドイツの産業界で活躍する研究者にもアプローチし、産学問わず幅広く参加を呼びかけてきました。

現在、私たちの交流会をモデルとして、欧州他国でも同様の会が相次いで開催されています。今後さらにドイツの交流会が継続し、欧州シリーズ化も加速していくことで、旅行のついでに各地の研究環境について知れる気楽な機会が増えていけばと思います。

▲ドイツ研究者ネットワーク交流会の様子

センター長コラム

学問の自由を図る

センター長　林　正彦

毎年発表されている「学問の自由度指数（Academic Freedom Index）」で、日本は 0.6 点（0 が最低で 1 が最高）と、179 か国中 102 位の凡庸な結果でした。（https://academic-freedom-index.net/; 世界地図上で各国の指標が簡単に見られます）。日本の指数の内訳を見てみると、対象 5 項目のうち「機関の自治」の評価が 1.74 点（0 が最低で 4 が最高）と特に低いです。世界的に見ると、日本は政府（文部科学省）の大学運営への影響が強い部類に属しています（予算の依存は除外して）。また大学側としても（予算は別として）政府に依存しすぎの傾向があります。このようなファクターが、「機関の自治」の低い値に現れているようです。

ちなみにドイツの指数は 0.93 と高く、11 位です。ドイツには「科学技術自由法」があって、研究・教育機関に大きな自由度と創造的な環境を保証しています。学問の発展には「金は出しても口は出さず」の方針が最も効果的であることが、政治家や学者の間では共有されています。他のヨーロッパ諸国の指数も概ね 0.8 以上。台湾は 0.87、韓国は 0.83、アメリカは 0.69 となっています。

「そもそもそんな指標があてになるのか？」と疑問に思うのが普通でしょう。「学問の自由」は簡単に語れるものではありません。したがって、「学問の自由」を定義したり、その度合いを評価したりすることは専門的な研究となります。その結果は査読論文に投稿され、ピアレビューを経て出版され、研究として全世界から評価・批判されます。

「学問の自由度指数」は、エアランゲン大学（Friedrich-Alexander Universität Erlangen-Nürnberg, FAU）の政治学研究所（Institute of Political Science）が毎年発表しています。これは、「民主主義を概念化し測定する」ための研究プロジェクト V-DEM（Varieties of Democracy）の一環であり（https://www.v-dem.net/）、ヨーテボリ大学を中心に、日本を含めた多くの国の研究者が参画しています。

V-DEM、あるいはその一部としての学問の自由の研究は、世界的に見てユニークな試みで、他に類似の例はほとんどないようです。関連論文のなかでは「（この研究は）世界の学問の自由を初めて徹底的に評価したものであり、（中略）過去に類似の研究はいくつか存在するが、それらは地理的・時間的に限定されており、学問の自由の度合いを、時空を超えて包括的に示すには不十分だった」と述べられています。

そもそも世界的に合意された「学問の自由」の定義はあるのでしょうか？

この問いに対しては、国連の「経済的・社会的・文化的権利委員会（CESCR）」が、1966 年の「経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約」の第 15 条第 3 項をもとに、2020 年 4 月に以下のように定義しているとのことです。

「研究者は、独立に下した判断に対して不当な影響から保護されているか。研究者は自律的な研究機関を設立し、研究の目的・目標や、取るべき手法を定めることができるか。研究者には、特定のプロジェクトの倫理的価値を自由に公然と問う自由と、良心にしたがってそのようなプロジェクトから撤退する権利があるか。研究者が国内外の他の研究者と協力する自由はあるか。科学的データとその解析結果を、政策立案者や、また可能な限り一般の人々と共有しているか。」

研究グループでは、この定義を規範とし、これまでに出版された論文や、国際的な政策立案者、学者、高等教育分野の擁護者との議論に基づき、学問の自由を実質的に実現するために不可欠な要素として、以下の 4 項目を定めています。

① 研究と教育の自由
② 学術交流と成果公表の自由
③ 機関の自治
④ キャンパスの品位

また、これらの要素だけでは捉えきれないと思われる側面は、

⑤ 学術的・文化的表現の自由

で代用しています。この 5 番目の要素は V-DEM プロジェクト全体のデータセットには含まれていますが、「表現の自由」は「学問の自由」とは異なっています。この調査では、それに留意したうえで、その他の要素を代表するものとして、この項目で代用することにしたようです。

実際の調査は 179 か国を対象に 2329 人の研究者が実施しています。上述の 5 項目について、対象国ごとに専門的知識をもつ数人の研究者が評価を行って数値化するわけです。評価者ごとのバイアスを無くすため、評価者にはあらかじめ仮想的な質問を出して点数をつけてもらい、そのデータ（モデル）を用いて較正し、最終的な指数を出しています（ベイズ推定）。この手法の詳細を記した論文や、品質評価を行った論文も査読論文として出版されています。最終的に導出された指数（０と１の間の値）に対して、信頼度 95％の推定区間は±0.1 程度となっています。この手法で行う限り、評価者が替わっても導出された指数はそれくらいの範囲に入るものと言えましょう。

なお、「学問の自由度指数」が高い国が大きな研究成果を挙げているかと問えば、必ずしもそうなってはいません。研究成果は、むしろ各国が拠出している学術予算との相関が大きいと感じます。

面白かったのは、学問の自由度指数が最も悪い国（0.2 未満）の 75％以上が、学問の自由に関する憲法上の保護を導入しているという事実です。

センターからのお知らせメール配信登録のお願い

不定期（月 1～2 回程度）で本センターからお知らせメールを配信しますので、受信希望の方々のご登録をお待ちしています。
登録内容は本センター内にて保持し、本メール配信の目的にのみ使用し、公開はしません。ご登録いただける方は、E メール（bonn-info@overseas.jsps.go.jp）まで、以下の登録内容をお送りください。多くの方々のご登録をお待ちしています。

・メールアドレス（必須）
・氏名（任意）
・所属機関（任意・英語表記）
・所属部局（任意・英語表記）（学部名や機関内の部署名など）
・職名（任意・英語表記）

日本人研究者ネットワーク（JR-Net）のご紹介

本センターHP では、ドイツ語圏で自主的に立ち上げ運用されている日本人研究者ネットワークを紹介しています。

詳細はこちらをご参照ください。

https://www.jsps-bonn.de/ja/to-all-japanese-researchers/japanese-researchers-network/

日本学術振興会ボン研究連絡センター
JSPS Bonn Office
Wissenschaftszentrum
Ahrstrasse 58, 53175 Bonn（事務所住所）
Postanschrift: 20 14 48, 53144 Bonn （郵便物用）
Tel. +49(0)228-375050
Fax +49(0)228-957777
www.jsps-bonn.de